

## 特別講演「中国度量衡展開幕式に参加して」

講師：県計量協会会長 加島 淳一郎



参加者一同（前列中央右は、加島会長。中央左の女性は、丘光明さ

が書かれた「中国古代度量衡」という本を日本の計量史学界の会員だった私が、当時の学会の会長に頼まれて訳したものです。そのとき話した内容は全て、この丘光明さんの書かれたものです。それで、2005年7月に北京で「国際計量会議」が開催された折り、私も参加して初めて丘光明さんにお会いし、いろいろ話をさせてもらいました。ところが、本を沢山書かれていますから、随分お歳かなと思っていましたが、私と同年ということが判り、相手も私が多少、中国語を話せたものですから、すごく親近感を持ってくださりまして、去年、世界計量記念日5月20日に吉林省通化(つうか)市に招いてくれました。そこでは修正薬業という、董事長(社長)は修という方が薬屋さんをやってみて、その敷地内に丘光明さんの指導で「修正度量衡展览馆」というものを作られたんですね。5月20日の世界計量日に開幕式があり、私は招待されました。日本から中国北京までの費用は、そちらで持ってください、あとは北京からその通化市往復の旅費から飯代、アルコール代まで全て相手持ちということで行って参りまして、非常に良い旅をして来ました。その時の展示品や関連したことについて、お話をさせて頂きたいと思えます。

ところで日本で世界計量記念日が5月20日というのを知っている方おられますか。何で5月20日が世界計量記念日なのか、お判りの方いらっしゃいますか。これは1875年の5月20日にパリでメートル条約が署名された日です。日本は、日本の計量法の発布の日を計量記念日にしてはいますが、世界で計量記念日というのは5月20日、メートル条約が締結された日です。

3/11の震災のあとのこういう時期でございますので総会の後、講演会はやめにして早くお宅に帰れるといいんじゃないかと申し上げたのですが、大勢の方にお残り頂きましてありがとうございます。実は、2004年の3月の総会の時に「中国度量衡単位の変遷」ということでお話をさせて頂いたことがあります(計量かながわNo.3\_掲載)。そのネタは、中国でも有名な計量の歴史研究家で丘光明(きゅうこうめい)さんという女性がおられ、この方



写真1「黄河文明の…」



写真2 「隱公呂氏缶容十斗」

これは戦国時代の秦の時代のもので当時の1斗は20リットル、これはおそらく穀物用の容器だと言われました。で「今までは、これは、よそ者には見せたことがありません。外国人に見せるのは、あなたが初めてだ」とも言われ、写真に撮るのもOKしてくれました。相手の国の言葉の話せるのは、いいこともあるなあということを感じたひとつです。

(写真\_3) これは5月18日に北京空港に丘光明さんがわざわざ迎えに来てくださった時のものです。もう一人の女性はオーバルの北京事務所の女性で5年前に丘光明さんと食事をした時に通訳をしてくれた女性です。彼女は同時通訳ができますからすごいですよ。日本の新潟大学で日本語を勉強した人です。



いなかったかもしれない、そういうことでも山海関は有名な場所です。

山海関から北に上がって通化までいきました。通化は北朝鮮との国境から僅か70キロ位の所です。北京から通化まで行くのに列車で昼の2時に出て翌朝、7時半に着きました。もちろんあまり早く着きすぎてもいけないのでスピードを落としていたのかもしれませんが、17時間半も掛かり

今回の訪中の前に、たまたま家内が所属する衝動会の「黄河文明の源流を訪ねる旅」というのに参加したことがあります。西安から150キロ西にあります陝西省(せんせいしょう)鳳県(ほうけん)の秦の、始皇帝よりずっと昔の旧都があったところの発掘現場を見学した時に、いろんな物があったのですが「私は日本計量史学会の理事をやっています。当時の度量衡器はありますか」と通訳を通さないうでじかに中国語でお願いしたところ、相手はすっかり喜ばれまして、じゃ、と出してくれたものがこれです(写真\_1、2)。表面に隱公呂氏缶容十斗と彫ってあります。



写真3 丘光明さんのお出迎え

5月の19日に北京を14時発の列車で万里の長城の東端に海にも何キロか入りこんだ山海関がありますが、北京から山海関を通って行ったわけです。山海関は非常に有名な所です。明が滅びて清が中国を治めました、この清は満州国なんですね。元来、山海関の所で門が閉まっていますから、北の清の大軍は入れなかったわけです。(当時、明で反旗を翻していた)李自成の軍は北京を陥落させ明の皇帝は自殺することになりますが、(山海関を守る明の武将、呉三桂は西から李自成軍、北には清の軍がいました)このときに呉三桂は李自成軍の頭領に自分の妾が奪われてしまったので、それを怒り李自成を討つために山海関の門を開け、北の清の軍を引き入れたんですね。呉三桂がいなかったら清はできて

ました。距離数でざっと計って千百キロ、横浜から福岡くらいの距離です。それを夜行列車に乗ってトコトコ、トコトコと行って来ました。



吉林省の通化というのは、地図で朝鮮民主主義人民共和国と書いてあるところのちょっと上のところです。

(写真\_4) これは通化市にある「広開土王（こうかいどおう）の碑」です。好太王の碑とも呼び、高句麗の有名な王です。この高句麗19代目の王は勢力があり、亡くなった後に部下が作った碑です。高さ6.3メートル、幅が1.52メートルあり、今はもう風化寸前ですからガラスで囲ってあります。ですから中にどんな文が彫ってあるか殆んど見えないですけど、この碑には倭のことが書かれてあります。この碑ができましたのは西暦414年です。広開土王は374年から391年に高句麗

の王になって412年に亡くなられています、ここに倭の国のことが書かれているのですね。「倭が渡海して来て百濟（くだら）や加羅（から）、新羅（しらぎ）を破った。その倭を俺たちが破ったのだ」ということをいっています。その頃、高句麗はこの辺が本拠地でしたけれど、だんだん朝鮮半島のほうに下がってきています。この高句麗という国の王だったのです。通化市というのは人口230万人です。こんなところでも230万人いるということです。



写真4 通化市「広開土王の碑」

(写真\_5) これは中国度量衡研究会、中国修正展覽館、度量衡展、開幕式云々と書いてありますが、せっかく集まるのだからということで見ただけでなく



写真5 会場をバックに加島会長

て、全国から計量に関係する人が来たものですから計量に関する討論会をやりましょうということで討論会をやっています。これはその入り口のところのまだ式典が始まる前に撮った写真です。

(写真\_6) これは私が祝辞を述べているところです。私の後ろの右から二人目の方が計量司という日本で言うと計量行政室の司長さんです。計量を司るところの親分だということです。この人も5年前に丘光明さんと食事をしたときに、お呼びして一緒に食事をしています。中国語で老朋友(らおぼんゆう)古い友達ということになります。友あり遠方より来たりの朋友です。そういう人たちも一緒にいるところで私も祝辞を述べさせていただきました。



写真6 祝辞を述べる加島会長

(写真\_7) これが中に入れて見たものです。北魏時代の北魏の分銅です。大体三千点くらいを展示しています。茶屋さんが作った為か、殆んどが衡器ですね。



写真7 北魏の分銅

(写真\_8) これも分銅です。



写真8 分銅

が秦の王様になった時に商鞅を首にし、商鞅は逃げようとしてよその国に行こうとしたんですけども、ところが商鞅は自分で作った法律に身分証明書を持っていない者は旅館に泊めちゃいかんとか、国境を越えるときは持っていなければいけないとか、既に商鞅は身分証明書を取り上げられていますので、無いわけですから従って捕らえられて死刑にされ、ただ死刑にされただけでなく、死体を馬に引かせて、手と足を四方の紐で引かせて胴をちぎられました。それだけ皇太子に恨まれていた男です。その商鞅の枱を持って自分も統一するよと。この始皇帝は度量衡の単位を統一し、言葉、漢字も統一しました。やはり非常に偉い人なのですね。これが大体200ミリリットルです。で、この商鞅の方枱(ほうしょう)は現在、上海博物館に置いてありますが、常設していないので残念ながら私は見たことがありません。

(写真\_9) この秦の始皇帝が手で持っているのは、実は後でも出てきますけれども、始皇帝より100年位昔に商鞅(しょうおう)という人が、枱の約200ミリリットル入る基準器を作りました。「俺もこれをもう一回基準器として使うよ」というところを秦の始皇帝が示しているという絵を出しているのです。商鞅という人は、よその国の人ですけども秦の王様が知識人を募集したときに応じて行って、そこでいろいろな変法、法律を変えたのですね。商鞅の変法というのは中国の歴史を習う時には必ず出てきます。商鞅というのは偉い人です。ところが商鞅の時代の王様の息子、要するに皇太子という



写真9 方枱を持つ始皇帝



写真 10 尺

(写真\_10) これは私が正倉院展に行った時に見てきましたけれども、尺ですね。唐時代の尺です。実は、その正倉院展に行った時に、この横型を買いました。印が一、二、三、四、五、六、七、八、九、十ありますから、で一尺です。正倉院展には、買ってきた赤と白しか無かったですけれども、売っていたのは黒いものでした。それでも、記念にと思って買ってきたわけです。そんなに高くは無かったですね。もちろんセルロイドで作った物です。

(写真\_11) 太平天国をご存知ですか。清の時代の末期に洪秀全(こうしゅうぜん)という者が、私はキリストの弟だとか孫だとか言って反乱を起こし、かなりの所を占拠したんですね。なんと、その時に太平天国でもこうやって分銅を作っています。いかに



写真 11 太平天国の分銅

その分銅というか、何かを計ってというのが大事だと、太平天国みたいな反乱軍でもこうやって分銅を作るのですね。大したものですよ。これは高さ55センチ、底の径が48センチ、重さが114キロあるということです。そこに聖帝と書いてあります。洪秀全は聖帝と呼ばれていたのです。年数も干支で書かれてあり、1853年に南京を占領して天京と改称した、その頃の作品です。これは1861年に作られたものです。辛の酉の11年と書かれています。西暦に直して1861年です。



写真 12 明時代の展示品コーナー

(写真\_12) これは

明時代の物を私が見ているところです。殆んど分銅か何かが多いですね。やっぱり薬屋さんですから錘(おもり)が非常に大事だったのです。錘が大体7、8割です。



写真 13 本物の何倍もある王莽嘉量

(写真\_13) これは王莽(おうもう)新莽嘉量(しんもうかりょう)という非常にりっぱな標準品があります。王莽という人は漢王の奥方の親類だったのですが、漢を乗っ取っちゃったという人物が作らせたものです。実物は、実は蒋介石が台湾に持って行き台湾の故宮博物院に常時展示されています。修正に録られたものは本物の3倍も4倍もあります。向こうに持っていったら、俺たちはもっとでかいのを作っちゃえと、私は何の意味も無いと思うのですが。私の隣の方が修董事長です。それでこれは、本物で説明しますと、4つの量が計れます。中心の胴の上と下が分かれています。まず一番大きいところの高さが一尺ありまして一斛(こく)といいます。斗(と)の上です。下のほうは一寸しかなく、一寸と一尺でく

修正に録られたものは本物の3倍も4倍もあります。向こうに持っていったら、俺たちはもっとでかいのを作っちゃえと、私は何の意味も無いと思うのですが。私の隣の方が修董事長です。それでこれは、本物で説明しますと、4つの量が計れます。中心の胴の上と下が分かれています。まず一番大きいところの高さが一尺ありまして一斛(こく)といいます。斗(と)の上です。下のほうは一寸しかなく、一寸と一尺でく

びれています。一寸の方は容量が一斗です。当時の一斗です。脇の容器は一升です。一斗の十分の一ですね。それで高さが2.5寸。で、こっちも二つに2対1に分かれていまして上が一寸で合、下が龠（やく）という単位です。2龠は1合で、10合が1升、10升が1斗、10斗が1斛です。従って、これはもう全部寸法が判っていますから、本物の方は、長さの標準にもなるし、量の標準にもなるし、全体で重さも判っていますから重さの標準にもなる。度（長さ）量（容積）衡（重さ）全ての標準になるという優れた物です。で、この王莽という人は大体、漢のちょうど中間ですから紀元前、後の頃の人です。



写真 14 参加者記念撮影

（写真\_14）これは、参加していた人達と一緒に撮った写真ですけども、後で出てきますけども、天津（てんしん）の裁判官だった人がいます。それで裁判官というのは西洋でもそうですけれども、裁判所の神（正義の女神）に必ず秤がついています。秤は正義が計るのだよということになっていますから、秤屋さんのかたではないのですが、この人も秤の研究はすごいですね。それで、たまたま飲むときに私が隣に座りまして、二人で50度のパイカルを飲み交わしまして、すっかり気に入られて、分銅の本を頂戴いたしました。後で報告しますが、全部、分銅です。で、実はこの

本を日本の計量史学会の総会の時に皆さんにお見せしたのです。そうしたら「加島さんすごいのを貰ってきたね。ひとつ今度それを貸してくれないか」とか申し込みが殺到しまして、それじゃ神奈川県の方に先ずお話ししようと思って今日持って参りました。



战国・秦 商鞅铜方升 商鞅于公元前344年制造的标准量器。铭文：“十六寸五分一（16.2立方寸）为升”。经实测后推算，方升深1寸，宽3寸，长5.4寸，得一尺合23.1厘米，一升合200毫升

写真 15 方斛

（写真\_15）これが先ほど言いました商鞅の方斛です。これは実物の写真です。これはさっき言いましたように標準器になってずっと現在まであり、上海博物館にあるものです。

これはついでですが、王莽の頃に、王莽という人は政治家ですから計量に直接は関係ないのですが、その部下に非常に計量に詳しい人がい

て、その人が先ほどの王莽嘉量も作ったのですが、（写真\_16）これは何だと思いませんか。ノギスに近いですね。西洋でノギスが作られたのが1700年位ですが、これは紀元前ちょうど頃ですから1700年も前に中国ではノギスを作っているのです。いやあ、すごいなと思います。ところが中国の人は謙遜しているのかどうか知りませんが、これはノギスとは違う、と。挟み尺です、と。その人の説明では、私には何を言っているのだから判らないのですけども、ノギスに似てはいるがバーニヤ読取り原理ではなく、唯一つのメモリを活動尺に有する挟み尺であると。しかし、とにかく紀元前後に、こういうのを作っているのだから、これはやっぱりすごいものですね。



写真 16 挟み尺 (ノギス?)

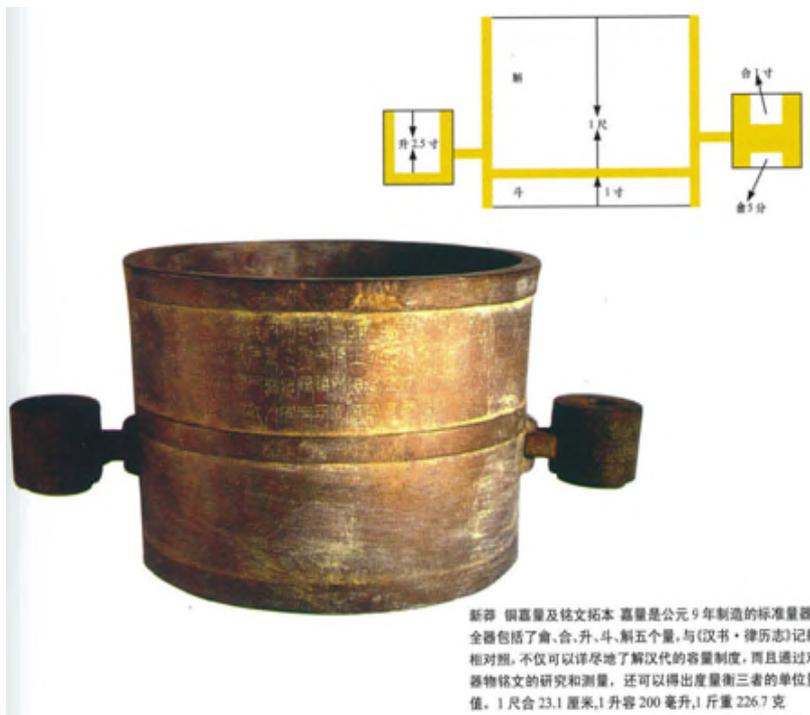


写真 17 王莽嘉量

が王様を信頼したということで権力の権になったのだと。で、ついでにもうひとつ、私が持っている中国語の厚い辞書、中国語から日本語に訳す中日辞典で、それでも権という字を引きましたら一番に分銅のことって書いてある。権力の権は3番目くらいです。ですから、やっぱり権というのは、分銅からきているのです。権力のほうは、これの後にできたことだから、私もびっくりしました。で、これは小さいのから大きいのがずっとありますけども。一番小さいのが、これが楚の時代の分銅です。青銅製です。青銅で作ってありまして、大体紀元前475年から222年頃のもので、小さいものは直径1センチ、大きいのが5.5センチです。

(写真\_17) これは先ほども言いましたが、長さも書いてありますが、本物は、このくらいのおおきさなのです。大体直径が30センチくらい。さっきの模型は人と比べると1メートルくらいありそうです。寸法の違う模型を作っても、と私も思ったのです。

ここからは貰った分銅の本に出てくるものを紹介します。(写真\_18) これが分銅です。それで、本をくれた人が、分銅に関してちょっと面白いことを言っているのです。「分銅のことを昔、権(けん)と言った。権というのは元来、分銅を意味していた。というもので正しい数値が計れるから、それをもって権力の権になったのだ」と言うのです。本当かいなと思って私、辞書を引いてみました。諸橋轍次(もろはしてつじ)先生の大漢和辞典というのを私は持っていて、全部で18巻の漢和辞典ですけども、それで権引きましたら、ご明解ですよ。「権」は、一番に分銅のことをいっています。十番目くらいに権力に使われています。要するに分銅をもって正しい値を人民に知らせて、そういうことから皆

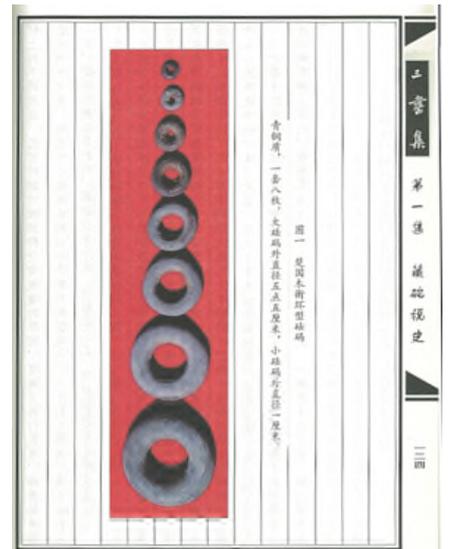


写真 18 分銅



写真 19 秦朝の分銅

り仏教の塔、仏塔を模して作った分銅も沢山あるということなのですね。

(写真\_19) これが秦朝の時代の分銅です。

(写真\_20) これが唐朝の、唐の頃の分銅でして貞観4年10月5日に作るというふうに書いてあります。錫及び各種の金属でできていて高さが7センチ、上のやつですね。それから塔みたいな格好をしているのがありますけども唐の時代は仏教も流行って



写真 20 唐朝の分銅

(写真\_21) これはなんと陶磁器で作った分銅です。明朝5代皇帝の宣徳帝の在位10年目に作ったということで1430年前くらいのもので。それで寿という字が12個書かれています。ということで青華寿劍、青華の寿という字の入った分銅であるよということが書いてありますね。高さが11センチ、底の直径が9センチ、頂点のところは6.2センチです。

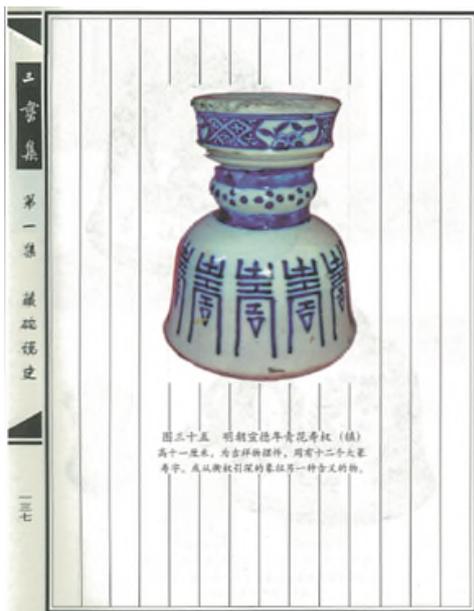


写真 21 陶磁器製分銅

(写真\_22) これは、1525年前後、明朝12代、嘉靖帝(かせい)の頃の青花彩(せいかさ)です。龍が玉を持っているところがあるのです。龍が書かれています。龍の爪を



写真 22 皇帝専用の分銅

よく見ますと5本ありますから、5本の龍は皇帝にしか許されてないです。5本の龍は皇帝、3本は皇太子とかということで、民間で5本の龍なんか書いたらすぐ死刑です。そういう時代のものでして、これは皇帝専用の5本爪龍です。もし使用者があればたちまち死罪だということです。確実に皇帝のために作ったものであると、皇帝専用品だということです。大明の皇帝の象徴の権、分銅だということです。

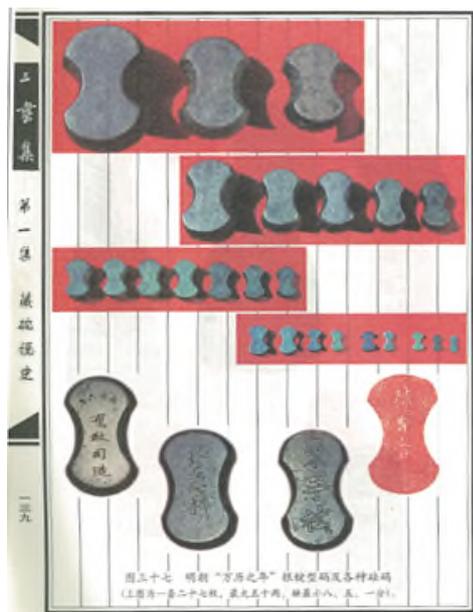


写真 23 銀錠型分銅

高さが19センチ、重さが8キロです。これは、青銅で作られております。清朝時代のものです。

(写真\_23) これは小判型というか何型というか、こういうものの中の銀錠型と言ってますけれども、万暦4年、明の時代の分銅です。西暦で言いますと1578年の物です。

(写真\_24) これは朱雀なんですね。朱雀というのは相撲の四本柱ご存知でしょうけど、青龍、白虎、朱雀、玄武と、あれからきてるんですね。朱雀は朱ですね。玄武っていうのは黒。そういう方向に全部四方、東西南北を表しますけども、そういう大事な朱雀の大型の分銅だということで、

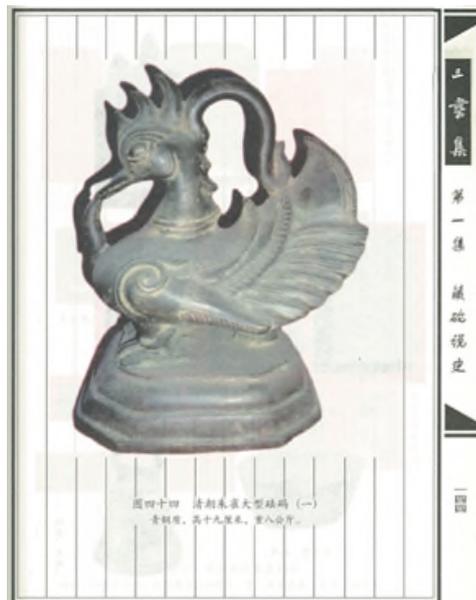


写真 24 朱雀

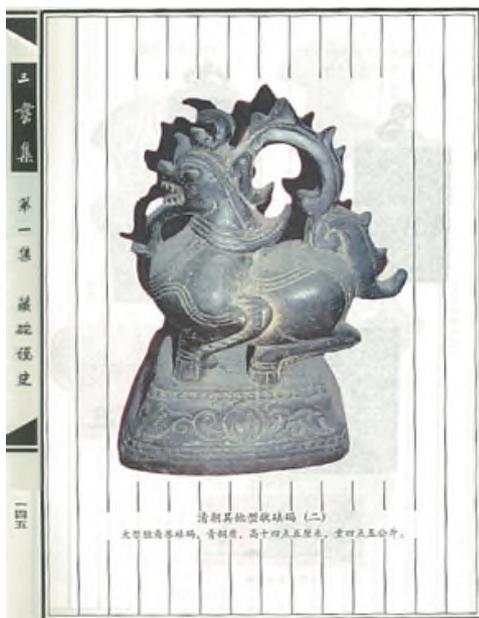


写真 25 一角獣

(写真\_25) これも似たようなものです。これは鳥ではなく、角が一本ある一角獣ということで、これは14.5センチで4.5キロ。ともに青銅でできています。

(写真\_26) ご紹介の最後は、これは満州時代に日本が満州の皇帝に使わした分銅ということで、守谷商会製なのです。要するに日本国が満州の溥儀に、これを使えと使わせたものです。敵国から持たされたものはあまりいいものじゃないなんて書いてありますけども。要するに満州皇帝は日本から持っ



写真 26 満州皇帝の分銅

ていったものを使っていたという、これは一つの証拠ということですよ。

ということで、いろんな物を見てきましたけども、実際に見たり写真に撮ったりしたものの、まあ十分の一、十分の三くらいしか皆さんに紹介できなかったのですが、この本なんか本当に計量史学会で引っ張りだこになりまして、いろんなものが全部カラーで入ってまして、中には皇帝用の物もあれば、ちょっと重さもおかしいよというものもありますけども。まあ、問題は、三千点は陳列しているのですが、中国は大体、自分の自慢ばかりするんですね。中国という言葉も、日本のある人は「中国なんて言うのはけしからん。中心の国というところからきているのですからね。世界の中心にある国だということからきている」で、ある先生方は「私は、あそこは支那と言う」と。よって「チャイナ」の場合、支那からきているのだから英語でチャイナと言うのに、何で日本語にした時に「中国」と言わなきゃいけないのだというのが、その人の意見ですね。

ところが丘光明さんが最後に「どうです、すごいのを作ったでしょう」と威張るかと思ったらそうじゃないのですね。ここにも来て講義をしていただいた四日市の小林先生（計量かながわNo.6\_掲載 秤屋健蔵氏）を覚えていらっしゃいますか。あの方の秤の館の展示品はすごいのですよ。四千点以上お持ちです。しかも日本のだけでなく、中国のもあれば外国のもの、フランス、ドイツ、スペイン、アメリカ等お持ちです。丘光明さんも小林先生の秤の館をご覧になっています。それで「とても小林先生には及びつきません」と言われました。偉いなと思いました。私は日本へ帰って来てすぐ小林先生に電話しまして丘光明さんが、こんなことを言っていましたと報告させて頂きました。丘光明さんは、とにかくその小林先生のものにびっくりしまして、先ほどお見せしました商鞅の方枘の模型を作りましてね、小林先生のところにお渡ししているのですよ。今の中国の人にしちゃ、本当に謙虚な方だなと思って信頼しています。ただでめし食わして頂いたから、そういうことを言っているのではなくて。本当に、本なんかものすごく書かれていて、歴代、学者の方でして、おじいさんが清朝の進士ですから、科挙の試験を通っているのです。お父さんも学者だったそうですから三代続けての学者です。非常に偉い方で、今後も何かのときには丘光明さんにお会いできるのではないかなということを私は楽しみにしています。ということで今日は、これで終わらせて頂きたいと思います。

(広報 記)